

やすらぎ



「歎異抄」(第二十一回)

樫 暁 講述

「歎異抄」第十一章 続き

これは誓願の不思議を、むねと信じたてまつれば、名号の不思議も具足して、誓願・名号の不思議ひとつにして、さらにことなることなきなり。つぎにみずからのはからいをして、往生のたすけ・さわり、二様におもうは、誓願の不思議をばたのまづして、わがころに往生の業をばげみて、もうすところの念仏をも自行になすなり。このひとは、名号の不思議をも、また信ぜざるなり。信ぜざれども、辺地懈慢疑城胎宮にも往生して、果遂の願のゆえに、ついに報土に生ずるは、名号不思議のちからなり。これすなわち、誓願不思議のゆえなれば、ただひとつなるべし。

(真宗聖典六三一頁)

唯円は誓願と名号を別々に分けて信ずるというようなことは間違である。と指摘する。その唯円の言葉の背景には何かがあるかという、南無阿弥陀仏という言葉は仏の本願という意義を内蔵している言葉である。その本願のはたらきによつて我々はたすかすかしていくのである。自覚者にならしていただくのである。ところが本願のはたらきというのを最優先にして考える生き方をしていない。そういう私に対しても本願(誓願)が大事だと瞬間的に知らせていただく言葉が南無阿弥陀仏である。南無阿弥陀仏という言葉がはたらくから我々凡夫にとって、なるほどいつも頷かしていただくことができるのである。

南無阿弥陀仏という言葉になつてはたらくものがなかったならば、我々は教義を勉強して誓願不思議ということを知つていても、実際は世間事に振り回されて目覚めを

光照寺寺報

発行所
宗教法人光照寺

〒331-0821
さいたま市北区別所町102-2
電話：048-651-2781(代)
FAX：048-651-2753
E-mail
yasuragi@beige.ocn.ne.jp
ホームページ
http://www8.ocn.ne.jp/~koshoji

発行人
池田孝郎

実現することができない。教義として阿弥陀如来の本願を知っているにすぎないということになる。

言葉となった仏がある。その言葉となった仏が本願としてはたらきをあらわす。そして我々はたすかる。人間は言葉を使わなければ生きていけない存在であるが、煩惱の表現として言葉を使っている。我々を目覚めさせるはたらきを永遠にいつも完成している言葉が本当の言葉であり、親鸞聖人の云われる「撰取不捨の真言」ということです。我々を光の世界に導き入れていただくような真の言葉である。その真の言葉が大事にいただいくということが信心の生活である。

これは実践的なことであり、宗教哲学ということではなく、日常の苦しみから解放されていくということが教えるの目標である。

文責副住職 釈徹照

報恩講

十月二十八日(日)十二時

厳修

詳細は三頁



お盆法要



住職法話

この度は「観」の一字の意味を尋ね考えてみたい。それはどうしてかといえば、「我聞の会」で約十年間に及び「観經」を学んできて、いよいよよまとめに入り、次に「阿弥陀經」に入っていく段になり、「観」の意味を再度視点をかえて考えてみたいと思ったからです。

「観」の字を字引でひいてみると、みる、みせる、しめす、考え方等とある。「みる」は主體的に私が見るものでしょう。「みせる」は他動的意味をもっているものがあり、「しめす」も上の者が下の



者に指し示す意味も含むと受け止められます。「考え方」は自動的、他動的、主観的、客観的、上下左右からのみかた、考えかたの方向性をもっています。

「観光」といえば旅を想定します。私の持論ですが、観光には二つのタイプがあります。一つはあらかじめ調べてから行くタイプと、二つめに、予備知識なく行くタイプです。一つめのタイプは、応々にして予備知識の確認になっ

てしまい、初体験、発見の感動が薄れてしまいます。しかし、大事なところの見落しがない。二つめは、その逆で、感動と発見の連続になるが、大事な所を見落す場合がある。

旅といえば先日、関西方面の旅館に泊まり、焼物の箸置に「沓」の一字が書かれてあった。やさしい字であるが読めない。酔った勢いを借りて仲居さんに聞いてみたが、やはり読めない。そこで私は、得意になって「さんずいにはうと読めるこの字は方角を現わす」と勝手に解釈を披瀝した。そして、川に譬えて、この方角は上流か、それとも下流かと推論して、下流では海まで広がる、しかし、この字は上流の源流を示す字だと酔いにまかせて断定してみた。そして、旅から帰り辞典を引くが、やっと

「大漢和辞典」でその字にあう。それは「ハウ」と読み、二つの舟の意、水が盛なさま、川の名、泉の名とある。私はなお考えてみれば辞典の意味よりも、「沓」の意味を二つの方向で考え、「源流」を示すものと読む方が根源を尋ねる思考としてふさわしいように思う。

「広辞苑」で「観」の字を引いてみると、いくつかの意味の中に「真理を観察すること。また、細かな分別心。観念」とあった。

誠に私の勝手な分別心をもって主観的に沓の字を解釈した読み方である。しかし、真理を観察する意味からすると、一字の意味に尋ね調べ、情景を想像し、主観的に想定する思考方法は仏法的にはふさわしいように思う。「観經」には十三通りの観法として、「定善観」をお釈迦様は説かれる。まず「日想観」から説きはじめ、西方の夕日の沈む情景をイメージさせて、水想観、地想観、宝樹観、宝池観と進め、浄土や仏、菩薩をイメージさせて説かれる。誠に壮大で宇宙的であり、清浄である。しかし、私という主体がイメージする「観」です。親鸞聖人は、「観經」を、無量寿仏が衆生を「観たまう経」と頂いた。観る主体が逆転する受け止めです。南無阿弥陀仏。

小さな窓から

妹の家に男の子が生まれたとき、ご褒美にと言って、0のついた金額の銀行通帳をお嫁さんにプレゼントした。我が家とはすべて桁が違う。我が家の主婦も70歳近くで初めて孫に恵まれて舞い上がっている。何年来溜めた貯金箱を、ジャラジャラではなくガラガラとふりだしている。「思ったよりたくさんあった」と結構ご機嫌である。勿論0なんてついていない。妹の家は恵まれている、その幸せ振りをメールでユーモラスに送ってくるのを私は楽しみに待つ。息子の家庭サービスも中々良い。ツイ「そのようなおやじは出世は遅いけど」と言っていた。まった、当分メールが途絶えた。腹の底まで理解している相手だと思っても矢張り言葉には気を付けようなど痛感したことである。

澁谷恵美子

鈴の音

お浄土というのは、共に生きたい、「共に」という意欲によってつくられた世界

櫻原敬二(「生きる力」)

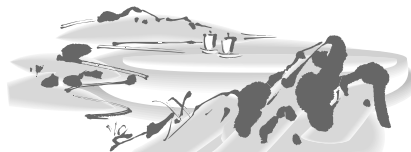
報恩講



報恩講

- ・10月28日(日)
- ・午前11時～3時まで
(10時30分受付)
- ・日中法要厳修
- ・お斉(お食事)
- ・法話 樸暁師
(元教学研究所所長、法泉寺前住職)
- ・講題 真実の宗教
一私にとって報恩とは一
- ・場所 光照寺本堂

※準備の都合上、出席の際は
お寺にご連絡下さい。



【報恩講は宗祖、親鸞聖人のご恩徳に報謝し、いのちの道理を深く尋ねる法要で、一年の中で最も大切な仏事です。真宗門徒として必ず勤める法要であり、光照寺の今年度最後の大きな法要です。是非ともご参詣下さい。今年も樸暁先生をお迎えして厳修致します。」

ある人が「関東の方は東本願寺が多いですよ」と云う。私が「何故ですか」と訊ねると、「関西

より向こうは西本願寺が多いんですよ」と云う。どうやら東日本と西日本で、東西両本願寺を区別しているようです。浄土真宗は知っている、或いは、東西両本願寺があるということも知っている。しかし、浄土真宗の教えとは如何なる教えなのかということまでは触れない。前述の質問はその氷山の一角であり、象徴的なものだと思います。僧侶が布教を怠っているからだという批判も聞こえてきそうですが、真宗の教えに生きるすべての人達が胸をつまらせる問題だと思っています。浄土真宗は、特に東西両本願寺は日本で最大の教団組織と云うものの、教団の大きさと信仰の充実とは同義ではありません。

ひとくち 歎異抄

羅漢：宿業の我身とはいかに。
「卯毛羊毛のさきにいるちりばかりもつくるつみ」。第13章。



宿世より、作りに作る微細な罪の
全てを身に引き受けて出発する。
川越喜多院の五百羅漢

昨年の樸先生の法話で「本願力の不思議を二種の回向として、往相回向・還相回向という、二つのはたらきとして教えてくださったのが親鸞聖人です。そのおかげで私達は浄土を願う生き方ができるようになりました。身体はこの娑婆世界に在るが、精神は浄土を生きる事ができる。絶対自由の世界、絶対平等な世界、絶対平和の世界をいつも我々は念仏することによって精神の内面に受け取って生きていく。老苦や死苦も超えられる。そういう世界を早く会得しなさいと、親鸞聖人は『教行信証』を書いてすすめられた。」とお話されました。

こういう世界観は聴聞を深めていかないと中々領けません。浄土真宗は「聞」の宗教と云われることがわかります。明治の念仏者、清沢先生は「我は実に此の念によりて、現に救済されつつを感じる」



孟蘭盆会法要

と感得されています。そのような味わいを報恩講の機会に、又、他力の救済を忘れていないだろうか確認していければと思います。ご家族、縁者お誘い合わせの上、ご参詣下さい。お待ちしております。副住職(釈徹照)

お知らせ

●法要のご案内

寺務所より

●報恩講

十月二十八日(日)、午前十一時より厳修。詳細は三頁参照。

●修正会

平成二十年一月一日元旦、午後一時より厳修。新年を阿弥陀如来のご尊前より出発致します。

●聞法会のお知らせ

●親鸞聖人のお教えに聞く会
毎月開催。午後一時半～四時半まで。講師は樸曉先生。和讃を学んでいます。日程は寺にお尋ね下さい。(※十月は報恩講です)

●大經の会

十月は二十日(土)の日帰り旅行に合流。十一月十一日(日)、十二月八日(土)、午前十時～午後三時まで。細川巖著正信偈讃仰(三)を学んでいます。お弁当持参して下さい。

●我聞の会

十月四日(木)、十一月十九日(月)、十二月十八日(火)、午後二時～四時まで。真宗の簡要を学んでいます。講師は住職。

●サークル活動 随時会員募集

①絵解きサークル
親鸞聖人の生涯のご伝絵などを伝えるものです。

②聲明サークル「響き」

日頃の勤行などを中心に味わいます。
ご興味の方はお気軽にお寺までご連絡ください。

●さいたま親鸞講座

十月六日(土)、十二月二十二日(土)、平成二十年二月二日(土)、午後二時～四時まで。講師は四衛亮先生。

●真宗のつどい

十月九日(火)、十二月八日(金)、午後二時～四時まで。講師は富岡秀善先生。会場、埼玉県内の寺院。ご参加の際はお寺にご連絡下さい。

●お願い

ご自宅で法事の際は駐車場をご用意下さい。宜しくお願いいたします。



吉澤 光昭

西木 順子

初摘りの真青の胡瓜供花となり
眼光に郷愁ありしねぶたかな
みんみんや土壘のうえに権巨木
日を溜めて夏萩ゆれる瓢箪池
黄菅咲くあしたあさつてしあさつて

花岡 要

憩ふ眼に松葉牡丹の赤ばかり
みちばたに刈れる小笹も盆支度
故郷にしろるべ減りゆく墓詣

布施 毅夫

炎天下托鉢僧の深編笠
かの日には帰らぬ憂い凌霄散る
政権の交代なるか戻梅雨
二階席楽譜の景色そぞろなり
新涼や佛法を選びもらいけり

釈 義深

雨降りて地が固まるか洪水か
有難さは空気の如く分らない
分かつて南無阿弥陀仏難かしい

短歌

田中 徳子

病院にて有縁の仏に供養すと僧高らかに経上げ賜う
ささやかな供物を上げて美しき岐阜提灯にあかりをとます

赤秀 品枝

めぐまれてありがたきかな夏のあさ母娘してゆく法の旅路は
差別する私の為に師は教う生きるところはその他大勢

布施 毅夫

亡き父が歩哨に立ちし二重橋目先に自爆の兵のありしと
「海の目」に震度六とうゆれ来たり古里近き中越の沖

六強の震度に本棚崩れて広辞苑さえ床に平伏す
一瞬に紙屑のごと瓦解せし我家を眺め声を失う

軒先で猛暑に討たれし蟬一羽起こしてやればいづくにか飛ぶ
病室の廊下を行き交う足音に若しやと思う日曜日の午後

篠原 潤子

帰省して母の作りしヒジキ煮腹いっぱい食べ大ゲンカもし
八十父母われを見送りし朽ちし玄関ありがたきかな

親と共に住みし弟作りなん帰省し我にマグロの刺身を
何想うひとともくもく掃除するモップ持つ背に我見とれいり

ヒザに腰緑内障を病みし母帰省し我をヒジキ煮て待つ
父愛でしミニ盆栽の山モミジ雨に打たれて光りかがやき

梵鐘



花岡 要 画

新聞によると去る八月十日アメリカの写真家ジョー・オダネル氏が死去した。米軍カメラマンとして原爆投下直後の広島・長崎の被災地を撮影した人であるが、中でも「焼き場に立つ少年」の写真で知られている。それは十二歳の少年が頭を垂れた弟を背負って直立不動で立っているもので、少年は死んだ弟を茶毘に付す為に順番を待っていた。氏はあまりの無残さに半世紀の間、公表できなかったと言う。

この写真から今の日本に失われてしまった多くのものが見えて来る。日本人の長い時間をかけて培われ伝え継がれて来た他人を思いやる心が、戦後の学校教育に無視され、そして各家庭でも疎かにされている。子供は親の背を見て育つものの、親が心に念じ身をもって示めさねばならない。少年と同世代だった當時を思い出させる一枚の写真である。

(釈恒浄)